Newspaper in Education

NIEニュース

エヌ・アイ・イー

Newspaper in Education

第94号
2019.7.15

◉特集・深い対話を育むNIE▶1～3 ◉新聞で育てる　新時代に必要な力▶4～5 ◉新聞の「今」―選挙　若者に分かりやすく伝える▶6 ◉ニュースパーク歴史展示を拡充▶7 ◉アドバイザー紹介／フラッシュニュース▶8～9 ◉〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶10

©2019年 日本新聞協会

編集・発行　一般社団法人 日本新聞協会　TEL：03-3591-4410（NIE担当）　FAX：03-3592-6577　e-mail：nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1　日本プレスセンタービル　[https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

深い対話を育むNIE

新学習指導要領が重視する対話的な学びとNIEは、親和性が高い。新聞から学んだ知識により培った考えや意見を自らの言葉で表現し、他者と共有する中で、「対話」は欠かせないプロセスであり、その繰り返しが深い学びへとつながっていく。なぜ今、対話が必要とされるのか。NIEによる対話的な学びで育むことのできる子供たちの力とは何か。NIEに携わる先生方に考察いただいた。

栃木県NIE推進協議会会長
宇都宮大学大学院教授
松本　敏

今年で24回目となるNIE全国大会は、「深い対話を育むNIE」をスローガンに掲げて8月1、2日の2日間、宇都宮市で開かれる。

新しい学習指導要領は「主体的・対話的で深い学び」を全ての学校段階で展開するように求めている。本大会のテーマは、そのキーワードを意識して決められたものであるが、「深い」を「学び」ではなく「対話」の修飾語としたことに込めた思いについて述べ、宇都宮大会への誘いとしたい。

「対話」のもつ哲学的含意

日本語の「対話」には「向かい合って話すこと」（『広辞苑』）ほどの意味しかないが、欧米の dialogue や Dialog にはもっと深い含意がある。これらの語源であるギリシャ語の dialogos が dia（互いに異なる）と logos（ことば・論理・思想）から成ることから分かるように、開かれた公正な議論の場で正面からぶつかり合い、対決を通じてより高い認識に到達しようとする営みを表すものである。

対話という営みを哲学的な深さで捉えたのはソクラテスであった。当時ソフィストたちが相手を言い負かす弁論術を教えていたのに対し、ソクラテスは、誰もが真理・真実を知らないということを大前提に、対話によって共同的に真理に近づこうとした。弟子のプラトンが幸い幾つもの「対話篇」を残してくれているので、私たちは真実探究の道具としての対話の在り方を学び続けることができたのである。

対話の欠如が招くもの

世界の歴史は、そういう意味での深い対話が欠けたときに、戦争や抑圧などの悲惨な出来事が起こることを教えてくれる。ナチス・ドイツが瞬く間に独裁体制を作り上げ、独善的な思想をもとに世界を物質的にも精神的にも汚したのはなぜだったか。

戦後の反省的思索の中では、現代社会が対話の公共性（誰にも公正に開かれていること）と合理性（理性的で公平な議論）を欠如させてしまう危険性をはらむことが指摘された。その公共性と合理性の欠如に、新聞をはじめとして本来公共的で合理的であるべきマスメディアも強く加担していたという事実も忘れてはならない。

大会テーマに込めた思い

今、日本と世界の現状を見るとき、国の指導者が事実と異なることを語り、周囲が追随して事実を軽視し、他国への敵意があおられ、格差が広がる中で市民同士の共感や連帯を分断しようとする言説があふれている。新聞などのマスメディアは、その中でどういう役割を果たしていくべきなのか。これからその世の中で育っていく子どもたちにはどんな力を付けてやればいいのだろうか。

そういう思いを「深い対話を育むNIE」に込めた。互いに異なる意見を持つことが保障され、公正な場で対等に議論し、勝ち負けよりもより価値のある結論を導き出そうとする対話を、新聞という優れたメディアを用いて育てていきたい。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」対話で育む提言力

埼玉県立
川越女子高等学校　教諭
NIE アドバイザー
佐藤　弥生

私が勤務する埼玉県立川越女子高等学校では、「いっしょに読もう！新聞コンクール」に第4回から参加し、この6年間で2人が最優秀賞を、8人が優秀賞を、14人が奨励賞をそれぞれ受賞した。

応募そのものは夏休みの宿題としたが、実際には国語の授業の中でそれぞれが作っている新聞ノートを見せ合ったり、朝のホームルームでスピーチをしたりと、日常的に新聞を使っているので、その延長上にある課題と言える。

また、総合的な学習として、職業インタビューやディベートも行っており、多くの授業でペアワークやグループワークなどを取り入れているので、「他者との対話」の重要性を生徒も理解していることだろう。

このコンクールへの応募は、様々な効用をもたらしたと考えている。

生徒はコンクールに応募するために、自分で記事を選び、インタビューする人を決める。また、選んだ記事に関して相手の意見を聞きとってまとめる部分では、実際には何回かの対話を重ねているはずである。その相手は、父母であったり、きょうだいであったり、祖父母であったり、友人であったりする。記事に出てくる「遠い」他者について、「近い」他者と対話する。自分の知らない世界について他者との意見交換から考えを深めていく。よって、インタビュー後の意見には新たな気づきがあり、そのうえで高校生なりの提言がある。

これはメディアリテラシーにとっても重要なことだ。記事に書かれていることをうのみにするのではなく、誰かと話し合うことで、理解を深めることができる。

一方で、インタビューされた側にも効用がある。ある保護者はこのコンクールの応募について「難しい問題について子どもに意見を求められて、もう大変なんです！」と困った顔をしながらも喜んでいた。

親といえども、世代の違う子どもたちとは異なる考えを持っている。また、大人といえども、分からない問題がある。記事を挟んで対話することは、子どもへの教育ということ以上に、世の中について一緒に考えていこうという覚悟につながるのではないか。

第8回コンクールで最優秀賞を受賞した芦川琴乃さんは、九州の友人に、戦時中に父親の戦死により「誉れの子」と呼ばれた子供に関する記事について意見を聞いたそうだ。新聞部の部長でもあった彼女は、「住む環境の違う同世代に意見を聞きたい」と考えたという。

今日の自分を作っているのは、昨日出会った他者である。明日の世界を作っていくのは、今日出会った他者との対話が発展した提言であり、行動ではないだろうか。

新聞作りから対話が生まれる

葛飾区立
上千葉小学校　教諭
加藤　みき子

2013年から、3年間勤務したインドネシアのスラバヤ日本人学校での新聞作りの実践を紹介したい。

当時受け持っていたのは、小学部3年生の9人。社会科の地域の学習も兼ねて、総合的な学習の時間で取り組んだ。「スラバヤ発見！～スラバヤの町を、これから来る日本人家族に紹介する地図をつくろう～」というテーマで進めた。スラバヤで日本人がよく利用するスーパーマーケット、日本人が住みやすいアパート、娯楽施設などを、はがきサイズの新聞原稿に、それぞれの児童が紹介していく。一人の児童が4～5か所ずつ担当した。

取材の方法は、主にインタビューである。自分の家族やその施設で働く人々に直接聞いていく。インドネシア語が話せる児童はインドネシア人にも聞くことができる。取材内容を学校に持ち込み、友達とどれを採用するかなど意見交換をする。同じ場所を取材したからこっちの内容にしようなど、3年生なりの「議論」が交わされる。長く滞在している児童は情報量も多い。その情報を転入してきたばかりの児童に紹介するという光景も見られた。

そして、一人一人が書き終えたはがき新聞を、模造紙4枚分ほどの大きなスラバヤマップに貼り付けていく（写真）。どこに誰のはがき新聞を貼り付けるか、ここでも様々なやりとりが

ある。

これら一連の作業全てが「対話」によって進められたのだ。

外国で暮らす児童にとって、日本の情報はあまりない。図書館もない中でどのような活動ができるか、考えついたのがこの題材である。当地の情報であれば収集しやすく、児童にとってより身近で、主体的に取り組みやすい。相手意識をもたせることで、さらに新聞に書く内容も具体的になる。

日本人とインドネシア人のダブルの児童がいた。日本語の語彙は少なく、話す力も書く力も日本から転入してきた児童に比べるとかなり低い。自信もないので、９人という小規模な学級でも、授業中は発表したがらない。しかし、この活動の中で、彼は自分の地元であるスラバヤを一番よく知っているという自信から、実によく調べてきた。しかも、インドネシア語を話せるので、情報も多い。多くの人との対話の中から、彼は話すことに自信をつけていった。友達同士の話し合いで、たくさんの意見を言えるようになっていった。

児童の「対話力」を育むには、どれだけ多く「対話」させるかが重要なのではないだろうか。人の意見をじっくり聞いたり、自分の考えを伝えたりしながら、友達と一つのものを作り上げていく。新聞作りは、多くの「対話」する機会を児童に与えることができるのである。調べる資料に限度があるがゆえに実践できた新聞作りが、児童の「対話力」を育むことに気がついた。

ディベートで培う対話力

作新学院小学部
副部長
八島　禎宏

本学院には建学の精神である「作新民」という言葉があり、「時代の変化に対応して自らを常に新しくし、変化する社会に対して積極的に働きかけ、社会を良き方向に変える能動的人間の育成の具現化を図る」を目標に掲げている。私は、この理念をＮＩＥ活動の根幹に置いている。

今夏開催の第24回ＮＩＥ全国大会宇都宮大会の２日目には、本校の６年３組が次のようなディベート授業を公開する予定である。

【研究実践テーマ】

「ディベート＆ダイアローグ（対話）で意見を発信しよう」

ディベートは毎年６年生を対象に展開している。ＮＩＥの一環であることを意識して、ディベート題材を新聞記事から選ぶことは多々あり、例えば、「防災には何が必要か」「原子力発電は必要か」「領土問題について」などが挙げられる。ディベートを通し、児童が新聞等から得た情報を自ら理解し、自分の言葉で発信できるようになることを目指している。

ディベートはいわゆる「討論会」ではなく、勝敗を決める「試合」であることを理解させる工夫も求められる。しかし、これまでに長らくＮＩＥでディベートを展開していて、勝敗決めに終始してしまう傾向があることに気付いた。そこで、①意見を述べる前に、まず相手の話を聴かなければならないこと、②普段の授業において、「今の意見は良かったよ」とすぐにフィードバックをすること、③「この部分の考えを深める努力をしてほしい」と児童に課題を与えること――等を意識してきた。

さらに重要な視点がある。意見が対立関係にあるときに、勝敗を決する以外にも別の方法があることを知っておくことだ。日常生活においては、むしろ、「折り合いをつける」ことの方が大切だと言える。そこで、「ダイアローグ」という手法を取り入れることにした。ディベートの延長線上にダイアローグ、つまり、真剣な話し合いがあり、その中で、相手の意見を尊重しつつ自分の意見との違いを認識して、相互理解を深めるのである。これにより、子どもたちはさらに深い納得感・安心感を得ることになった。実際に、相手の意見に納得した児童が相手側に「引っ越し」をするのが、本校独自のディベートである（写真）。

最後に一言。「宇都宮で会いましょう」

新聞で育てる 新時代に必要な力

変化の激しい時代を生き抜く子供たちには、自ら考えて判断し、表現する力など、さまざまな資質・能力を身につけることが求められている。こうした力の育成において、新聞活用が果たす役割はどのようなものか。全国学力・学習状況調査の問題の分析とともに、英語教育、ことばの力の育成という観点から、ＮＩＥの可能性を考える。

全国学力テストの分析から考える

東京学芸大学　准教授
中村　和弘

今年度の全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）は、知識・活用をどのようにして一体的に問うかが注目された。私が特に注目したのは、次の二点である。

一点目は、小学校国語の問題に見られた「工夫」について考えさせる問いである。

大問１は報告する文章を書く問題だが、問二では、公衆電話の使い方や特徴を、書き手がどのように工夫して書いているかが問われている。また、大問３のインタビューの問題では、問二で、聞き手が尋ね直したのはどのような工夫によるものかが問われている。

いずれも、「そのように工夫しているのはなぜか」という、書き手や聞き手の工夫の意図が問われているのが特徴である。この問いを考えるには、まず、書き方や質問の仕方にどのような工夫があるかという知識・技能が必要となる。また、相手や目的などに合わせて、それらの書き方や質問の仕方を実際にどう使えばよいか考える思考力や判断力も必要となる。

このように、これから求められる国語科の力は、知識・技能と思考力・判断力・表現力等とを別々ではなく、両輪で働くものとして考えていかなければならない。もっている知識・技能を元手として、その場の状況や相手、目的などによって、どのように書けばよいか、どのように尋ね直せばよいかを、自身で考えたり判断したりできるようになることが求められている。

二点目は、中学校国語の大問１の全国中学生新聞を使った問題である。

この問題では、問一で記事のリード文の役割理解、問二で記事の内容の読み取り、問三で短歌の鑑賞、問四で投稿するための封書の書き方と、さまざまな力が問われている。一見すると、どれも別々の力だが、新聞を読み解いたり活用したりする際に働く力であるという点では、これらはひとまとまりの力であると言うことができる。

「報告する文章を書く」「インタビューをする」「新聞を活用する」など、ひとまとまりの言語活動の場では、具体的な目的や課題、相手などが存在する。先に述べたように、それらに応じて、言葉や言葉の使い方に関する知識・技能と思考力・判断力・表現力等を組み合わせ、総合的に駆使しながら、書き方を工夫したり読み方を考えたりするなど、いわば言葉の「調整」ができるようになることも求められているのである。

小学生新聞や中学生新聞を扱うときにも、記事そのものを読むだけでなく、「この記事が興味深く感じるのは、どこに書き方の工夫があるからだろうか」など、さまざまな言葉に関する知識・技能や思考力・判断力・表現力等を働かせることができるよう、総合的に活用してはどうだろうか。

英語への関心を高めるＮＩＥ

新潟県三条市立
嵐南小学校　教諭
藤井　彩香

外国語活動でのＮＩＥと聞いて、疑問や不安が多々浮かぶことが予想される。しかし、小学生向けの新聞の中には、英語表現を扱ったコーナーや外国のことを分かりやすく紹介する記事が載っていることも多く、思っていたよりも活用しやすい。また、英文だけでなくイラストや写真なども豊富に使われており、子どもたちが楽しみながら記事に目を向けることもできる。

習い事等で英語を習っている子どもたちは、小学校の外国語活動や外国語科で扱う英語表現等を既に知っているため、自信をもって英語でコミュニケーションをとることができる。しか

新聞記事を提示し、児童が注目している場面

し、習っていない子どもたちにとっては難しい場合がある。そこで、そんな子どもたちの不安な気持ちを少しでも軽減させるために、新聞を用いるのもよい方法であると考える。

以下では、私の実践を通して、外国語活動における新聞活用法の一例を提案したい。

私の実践は、買い物のやり取りを通してオリジナルピザを作るという活動だ。その中で、欲しい食材の数を尋ねたり答えたりする英語の表現を知るために新聞を活用した。これらの表現が分かれば買い物がしやすくなるのに、と子どもたちは考えていたので、記事を提示したときのうれしそうな表情や「早く使ってみたい」という言葉が印象に残っている。子どもたちの知りたいという思いを高めてから記事を提示することも、新聞を効果的に活用するためのスパイスなのだと考える。また、記事に示されている、数を尋ねる表現を確認した後、その表現を児童が使いやすいように短く変えることで、子どもたちがやり取りの中で積極的に英語を使い、子どもたち同士で英語表現を教え合う姿も見られた。そのような姿が活動の中で少しでも多く見られるように、子どもたちの実態や思いをきちんと見極め、記事を選択することが大切である。

実際に外国語活動の中にＮＩＥを取り入れてみて、新聞記事を適切な場面で効果的に使うことで、子どもたちの学習意欲が高まることを実感できた。子どもたちのやってみたい、できるようになりたいという思いを高め、楽しい活動を豊富に取り入れることが、子どもたちの英語への興味・関心や英語力を伸ばすことにつながると考える。新聞を上手に取り入れながら、積極的に英語に取り組む子どもたちを育てていきたい。

教科「日本語」に込めた思い

世田谷区教育委員会事務局
教育指導課指導主事
佐藤　智彦

教科「日本語」は、子どもたちがことばの大切さに気付き、ことばを通して深く考え、自分を表現して心を通わせる喜びを知り、日本文化を大切にして、新たな文化を創造してほしいという願いから、世田谷区独自の教科として平成19年に創設された。

世田谷区では、「ことばは、人が考え、表現するための基盤となり、ことばの力を高めることが児童・生徒の社会性や学力を高める源になる」と考えている。この考えを基にしながら、新学習指導要領の全面実施に向けて、今後の教科「日本語」のあり方について検討を進め、次代を担う児童・生徒の力をさらに高めることをめざして改訂を進めている。

「ことばの力」を高める新聞を活用した学習の導入

教科「日本語」でめざす資質・能力をより確かに育成するため、「ことばの力の習得と活用」を通して、身に付けた力の活用の充実に向けた内容を取り入れた。

平成28年度から教科書の改訂に向けた検討を始め、中学校１年生は令和元年度から新しく作成した教科書を使用し、次年度には、小学校全学年と中学校２・３年生でも使用を開始する。新しい教科書では、新たな資質・能力を育成するために、ＮＩＥを導入した。新たな単元として、「新聞の活用の仕方について考える」学習と「新聞記事に表現する」学習の二つを設定している。

社会の出来事を伝える新聞を活用する教育の充実

「新聞を活用して考える」の単元では、池上彰氏の「新聞のよさ、ネットの落とし穴」を題材として取り上げ、これからの情報社会を生きていくために、さまざまなマスメディアによる情報収集の仕方や、新聞の構成や特性から、新聞の効果的な活用について考える学習としている。

「新聞づくりを体験しよう」の単元では、新聞記事の書き方を知り、伝わりやすい記事について考えたり、実際に取材を行い、記事を工夫して書いたりする学習としている。

新聞記事をただ読むのではなく、読み取った内容について自分の考えをもつこと、相手に伝わりやすい方法を考え、相手の受け止め方を考えた上で表現するなど、まさに「ことばの力」の育成につながる教材として新聞は非常に効果的である。また、小学校の教科書においても、新聞を活用した学習を取り上げ、小学校・中学校の接続も意識し、系統的に学べるようにしている。

これからの時代を生きる児童・生徒に必要な力を見据えるとともに、世田谷区独自の教科「日本語」を大切にしながら、新聞を効果的に活用する学習をカリキュラムマネジメントして、将来を担う児童・生徒の力をさらに高める取り組みとなるよう進めていきたい。

新聞の「今」

選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、3年が経った。学校現場で主権者教育が進む中、研究機関と協力し「マニフェストスイッチ」を活用した紙面づくりを行う新聞社に寄稿いただいた。

選挙　若者に分かりやすく伝える

信濃毎日新聞社
編集局報道部次長
牛山　健一

「想定以上に生徒自身が政治に興味を示した」

信濃毎日新聞は２０１８年８月の長野県知事選に向けて、早稲田大学マニフェスト研究所（東京）と協力し、現職と新人２人の立候補者の主張や政策を分かりやすくまとめた特集紙面を作った。冒頭のコメントは、この紙面を活用して授業を行った高校教員の感想だ。

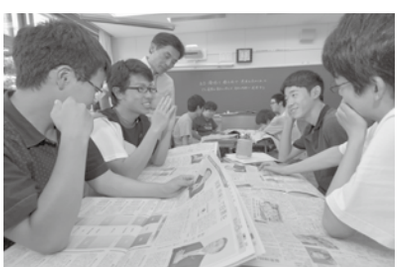
特集紙面は、同研究所が考案した書式「マニフェストスイッチ」に沿い、立候補者２人の主張や政策をまとめた。「政策注力分野」のグラフを大きく掲載。両候補者の政策で似ている点、異なる点を分かりやすく示した。「地域のありたい姿」「解決したい課題」といった候補者の基本的な考え方や、課題を解決するための具体的な施策も対比できる形で掲載。本紙独自の取り組みとして、１票を投じることの意義を「高校生・若者へのメッセージ」として、両候補者に寄せてもらった。

記事を活用し模擬投票

私たちは、授業で新聞を活用している教員らでつくる「長野県ＮＩＥ研究会」（会長・有賀久雄長野県松本工業高等学校教諭）と連携して、この特集紙面を中心に新聞記事を活用した主権者教育を事前に行い、実際の立候補者名を生徒に記してもらう模擬投票の実施を県内高校に呼び掛けた。選挙期間が夏休みに差し掛かったり、文化祭などの行事と重なったりする時期だったが、県全域にわたる高校計６校が参加。未来の有権者である18歳未満を含む１～３年生計１１８９人が模擬投票に参加した。

ワークシートの活用や、若者の投票率向上に向けた活動をしている大学生グループとの連携など、学校ごとに工夫を凝らした授業を展開した。生徒は両候補者の政策の違いなどについて活発に語り合った。その模様も紙面で詳報した。

選挙期間中、猛暑が続いた。両候補者は学校へのクーラー・エアコンの設置推進を公約に掲げていた。生徒は自分たちの学校生活と政治が結び付いたことを実感したに違いない。中には「うれしいけれど環境への負荷は高まる。併せて考えて進めてほしい」と、環境問題に思いを巡らす生徒もいた。感心した。



信濃毎日新聞の特集紙面を読みながら話し合う松本工業高校の生徒＝2018年７月18日　梅田拓朗撮影（信濃毎日新聞社提供）

模擬投票と実際の選挙の結果を比較した「振り返り授業」も取材して紙面化した。模擬投票の結果は、実際の選挙結果よりも現職と新人の得票差が大幅に縮まり、一部の高校では逆転するなど、興味深い結果が示された。生徒はそれぞれの観点や判断で投票していることがうかがえた。

担当教員からは、特集紙面は中立公平で分かりやすく、授業の教材としてとても扱いやすい――との高評価を得た。生徒は「実際の選挙」を通じて、政策や主張を見極め、自分の考えを持ち、１票を投じることの大切さを学んだ。

教室で「生の政治」を語る

18歳選挙権が導入された16年の参院選から３年がたつ。

主権者教育を行うに当たり、当初、教育現場から漏れ聞こえていた「政治的中立性の確保への不安」は薄らいでいるように思う。私たちの試みは、教室で「生の政治」を語らうことの重要性を学校・教員側に広めることにもなった。

一方で、スケジュールの過密さなどを理由に、選挙について社会科の通常授業で触れるといった程度にとどめている学校も少なくないようだ。

私たちが作った紙面は、候補者や読者、学校いずれからも「中立性」について問われたことはない。教員や生徒からは「内容がとても具体的で分かりやすい」との評価も得ている。模擬投票を実施する場合、「架空の選挙」より準備の負担が少なくて済むというメリットもある。

信濃毎日新聞社は今夏の参院選長野選挙区でも、マニフェストスイッチによる紙面作りを計画。県内学校に授業での活用を呼び掛けたところ、高校だけでなく、中学校、専門学校も実施を検討している。

若者に分かりやすい紙面作りをすることで、誰にも理解しやすい紙面になる。教員や生徒の声を反映させながら、より良い紙面を目指したい。

ニュースパーク 歴史展示を拡充

4月2日、歴史展示ゾーンを拡充したニュースパーク（日本新聞博物館）の新・常設展示がオープンした。歴史と現代の両面から情報と新聞を学ぶ展示内容となり、小中高の各学年で活用いただける施設になったと考えている。

当館は2016年7月、それまでの展示を一新する全面リニューアルを行った（本誌16年7月15日発行・第84号に詳細）。大量の情報があふれる現代社会に暮らす子どもたちに、情報を見極める力が大切であることを伝える展示を作り、学校現場から一定の評価を得ることができた。一方、「新聞の歴史に関する展示を大幅に縮小したことを残念に思う」との声も多く寄せられていた。

この点を踏まえて今回、新聞の歴史を体系的に紹介する展示ゾーン「新聞のあゆみ」を設置し（写真）、歴史資料の展示点数も倍以上に増やした。現代の情報社会に関する展示は、配置換えにより、ほぼすべて維持している。

「新聞のあゆみ」ゾーンは江戸時代のかわら版から明治・大正の新聞の発展、戦争の時代、戦後の新聞の再出発から現代までの歴史をたどる。このうち特に重視したのが「戦時統制期」のコーナーであり、事実をきちんと伝えられず、戦意高揚につながる報道を行った戦争中の新聞の問題から、民主主義にとって確かな情報がいかに大切かを考えてもらう展示である。

新・常設展の歴史展示と現代展示は「確かな情報の大切さと新聞が果たすべき役割」という統一したテーマを、それぞれの切り口で伝えている。情報と新聞について、これまで以上に多面的な知識を提供できるようになったと考えている。

当館はこれまで多くの校外学習を受け入れてきた。小学4年生国語、5年生社会の学習が中心だったが、今後は歴史の学習でも当館を活用いただければ幸いである。

全体で3か所（新聞の誕生、戦争と新聞を考える意味、災害時の新聞の役割）を、特に小中学生に学んでほしいポイントに設定し、「ここに注目！」のマークを付けている。

このほか、取材、編集から印刷、配達までの過程を紹介する「新聞が届くまで」や取材体験ゲームなどの人気コーナーは維持している。学校団体向けに各種体験プログラムを用意しているほか、昼食場所として利用いただける施設（多目的ルーム）もある。

当館は今後、新・常設展を生かしながら学校連携、教育連携をさらに強化し、NIEの普及にも貢献していきたい。

（新聞協会博物館事業部）

新聞の歴史を体系的に紹介する展示ゾーン「新聞のあゆみ」

第10回「いっしょに読もう！新聞コンクール」作品募集中！

新聞協会は、新聞を読んで気になった記事を選び、家族や友達と話し合った上で、感想や意見などを記入して応募する「いっしょに読もう！新聞コンクール」の募集を開始しています。応募対象は小・中・高校（高専）生で、締め切りは9月9日（月）必着です。夏休みの課題としても取り組みやすいコンクールです。多数のご応募をお待ちしています。

応募対象となる新聞は2018年9月10日から19年9月8日まで。応募用紙は、NIEサイト（https://nie.jp/）からダウンロードできます。作品の送付先は都道府県により異なります。詳細はNIEサイトをご覧ください。

来年のNIE全国大会は東京で開催

2020年開催の第25回NIE全国大会は、東京都NIE推進協議会を主管団体に東京で開催します。日程は東京オリンピック・パラリンピックを考慮して、同年11月22（日）、23（月・祝）の両日とします。会場は初日が日本大学文理学部百周年記念館（東京都世田谷区）、2日目は十文字中学・高等学校（同豊島区）です。プログラムなどの詳細は、決まり次第、NIEサイト（https://nie.jp/）等でお知らせします。

●東京都
浅岡　志津子
（あさおか・しずこ）
❶世田谷区立緑丘中学校
❷国語科　❸21年
❹さまざまな教育活動で取り入れられる機会を意識し、気になった記事をストックし話題にして、新聞を身近なものとすることである。

●東京都
代田　有紀
（しろた・ゆき）
❶東京都立荻窪高等学校
❷公民科　❸６年
❹文字情報だけでなく、写真や広告記事も活用しながら読み取る力を育てるために新聞を活用している。

●千葉県
石川　剛士
（いしかわ・たけし）
❶浦安市立日の出小学校
❷小学校全科　❸７年
❹発達段階に応じて、子供たちが考える力、書く力、読む力を楽しく育めるような活動を意識している。

●千葉県
芳賀　裕美
（はが・ひろみ）
❶市川市立須和田の丘支援学校
❷小学校全科　❸５年
❹子供たちが「新聞って私、ぼくの好きなものや気になることがいろいろ載っているんだ」と感じられるよう、新聞に親しむことを大切にしている。

●山梨県
石田　一元
（いしだ・かずもと）
❶甲府市役所生活福祉課
❷小学校全般・中学校国語
❸７年
❹新聞を通して多様なものの見方や考え方を培いたいと考え、新聞記事を基にした話し合い等の交流活動に力を入れてきた。

●山梨県
末木　良一
（すえき・りょういち）
❶甲府市子ども未来部子ども支援課
❷中学校国語科　❸７年
❹まず、新聞に触れることから始めて、生徒自身の興味関心を掘り起こし、問題意識をもって社会を見られるように新聞を授業等に生かしてきた。

●静岡県
伊藤　大介
（いとう・だいすけ）
❶静岡聖光学院中学校・高等学校
❷社会科　❸13年
❹教科書の単元に関連の深い記事を、日ごろから整理し活用する。ワークシートでは、複数の記事を比較する視点を大切にしている。

●愛知県
野田　恵美
（のだ・えみ）
❶尾張旭市立城山小学校
❷小学校全科　❸24年
❹「気軽に楽しく何度でも」をモットーに、子供たちの実態に合った活動、記事をもとに対話につながる活動となるよう工夫している。

●愛知県
脇田　恵
（わきだ・めぐみ）
❶一宮市立神山小学校
❷小学校全科　❸23年
❹新聞を学習に活用し、言語力を総合的に高める。新聞で知的好奇心を高め、教科書と社会の動きとのつながりをより身近に感じさせたい。

●新潟県
須山　哲也
（すやま・てつや）
❶糸魚川市立糸魚川小学校
❷小学校全科　❸６年
❹学びと生活をつなげ、思考・発信する手段として新聞を活用し、「親しむ」「作る」「考える」をキーワードに授業実践を行っている。

●新潟県
関　慎太郎
（せき・しんたろう）
❶新潟大学教育学部附属長岡小学校
❷小学校全科、家庭科
❸５年
❹継続的に新聞に親しむ場、実態・関心に即した記事選定が大切。記事の情報で問題解決する経験や社会とのつながりを実感する瞬間を工夫している。

●富山県
犀川　敏朗
（さいかわ・としろう）
❶富山県西部教育事務所
❷小学校、中学校社会科
❸８年
❹子供の「思考力・判断力・表現力等」を育てるための、「問い」を見いだす学習材や解決を図る根拠として活用することが大切である。

●富山県
高川　芳昭
（たかがわ・よしあき）
❶富山県西部教育事務所
❷小学校、中学校数学科
❸７年
❹子供たちにとって身近な出来事や地域の記事を取り上げ、児童生徒が興味・関心をもてるようにすることが大切である。

●福井県
富士　健一
（ふじ・けんいち）
❶福井県教育庁嶺南教育事務所指導相談課
❷社会科　❸６年
❹新聞を優れたメディア教材として捉え、授業を通した子供の情報活用力・言語力の育成に有効な NIE の在り方を追究している。

●福井県
平城　慶彦
（ひらぎ・よしひこ）
❶美浜町立美浜西小学校
❷小学校全科　❸３年
❹新聞をきっかけに「空き家カフェ」など、地域に参画するフィールド学習を積極的に実施。町内３校での共同学習にも取り組んでいる。

●岡山県
大塚　康広
（おおつか・やすひろ）
❶津山市立北陵中学校
❷国語　❸６年
❹新聞のみを取り上げて単元を構想するのではなく、教科書教材と関連させて単元を構想するようにしている。

●鳥取県
岩井　克之
（いわい・かつゆき）
❶元鳥取市立稲葉山小学校
❷小学校社会科　❸７年
❹子供たちが新聞を身近に感じることが大切であり、関心・意欲を高める仕掛けを工夫して新聞の魅力を伝えたい。

●大分県
佐藤　美登里
（さとう・みどり）
❶竹田市立緑ヶ丘中学校
❷国語科　❸17年
❹コラム学習をほぼ毎日実施し、NIE コーナーの更新も毎朝行う。継続することで生徒は新聞の特性と魅力を知り、親しむようになる。

NIEアドバイザー紹介

❶学校名　❷担当教科　❸NIE実践歴
❹新聞を活用するうえでの工夫を一言

（敬称略）

●北海道
矢島　勲
（やじま・いさお）
❶苫小牧市立日新小学校
❷道徳　❸10年
❹世の中にある心温まる話題を教材として加工し、児童の心に響く提示の仕方で道徳の授業を中心に活用していきたい。

●北海道
山﨑　健太郎
（やまざき・けんたろう）
❶札幌市立東栄中学校
❷社会科　❸16年
❹新聞は、今を伝える生きた教材である。社会の出来事に関心を持たせると同時に、生徒のアウトプットを大切にして、表現力等を育てたい。

●岩手県
関戸　裕
（せきど・ひろし）
❶岩手大学教育学部附属小学校
❷社会科、総合的な学習の時間　❸３年
❹新聞とは歴史を含む社会的事象と子供をつなぐツールである。資料としての新聞の価値に気付き、自ら活用する子供を育てたい。

●岩手県
高畑　嗣人
（たかはた・つぐと）
❶一戸町立奥中山小学校
❷小学校全科　❸17年
❹記事を「よむ」、考えを「かく」だけでなく、友達の考えを「きく」、それに対する自分の思いを「はなす」活動につなげること。

●岩手県
城内　千賀子
（じょうない・ちかこ）
❶花巻市立石鳥谷中学校
❷国語科　❸10年
❹複数紙の記事を読み比べること。興味のある記事をスクラップしておくこと。記事を読んで自分の考えをまとめること。

●岩手県
尾形　真也
（おがた・しんや）
❶岩手県立宮古商業高等学校
❷公民科　❸３年
❹教科書の基本的事項と理論を、社会の出来事から学んで考えるため、新聞を使った教材作りをしている。

●岩手県
鈴木　紗季
（すずき・さき）
❶岩手県立大槌高等学校
❷英語科　❸５年
❹できると思って取り組むこと。教科・キャリア教育など、さまざまな教育活動の場面で活用することで、生徒の幅広い成長につながるように実践している。

●秋田県
赤川　美和子
（あかがわ・みわこ）
❶横手市立十文字第一小学校
❷国語科　❸３年
❹横手市の全小中学校において、「何のために新聞を活用するのか」というねらいにふさわしい活用方法について研修を続けている。

●茨城県
坂場　安男
（さかば・やすお）
❶元茨城町立石崎小学校
❷社会科　❸30年
❹気になる記事をスクラップ。要約・感想を週１回提出。継続すると学力向上につながる。はがき新聞作成が手軽で表現力向上に効果的。

●埼玉県
白幡　貴弘
（しらはた・たかひろ）
❶吉川市教育委員会学校教育課
❷社会科　❸６年
❹成長段階に応じた新聞掲示の仕方、教科の垣根を越えた新聞利用、学校のカリキュラムに組み込む（朝読書など）。

●埼玉県
澁谷　将司
（しぶや・まさし）
❶三郷市立高州小学校
❷小学校全科　❸３年
❹新聞を通して「子どもと社会をつなげていく」という視点を忘れず、子供の興味関心を第一に、新聞教育に取り組んでいる。

●埼玉県
萩原　信一
（はぎわら・しんいち）
❶元さいたま市立沼影小学校
❷全教科　❸15年
❹資料活用能力の育成だけでなく、今学習していることと社会とのつながりを感じさせるため、さまざまな教科場面で新聞を活用している。

NIE フラッシュニュース

◇実践指定校に545校　新聞協会は、全国のＮＩＥ推進協議会から推薦された５４５校を２０１９年度ＮＩＥ実践指定校として認定しました。実践期間は原則２年間。指定校ごとに配達可能な一般日刊紙が一定期間購読でき、購読料は新聞協会と各新聞社が負担しています。これとは別に、15道府県のＮＩＥ推進協議会では独自認定校として計68校を認定しました。

◇文部科学省の有識者会議で報告　新聞協会は３月18日開催の「主権者教育推進会議」（篠原文也座長）で、主権者教育に関する新聞界の取り組みを報告しました。ヒアリングにはＮＩＥ委員会の町田智子委員長（当時、朝日東京）が出席。主権者に求められる資質・能力は新聞活用を通じて育むことができるとし、ＮＩＥタイムなどの実践事例を紹介しました。複数紙の読み比べの意義にも触れ、「複数紙を利用することで視点の違いを知り、討議などを通じて異論を乗り越えて合意形成するすべを学ぶことこそが大切だ」と述べました。

◇ＮＩＥ入門ガイドが完成　新聞協会はこのほど、初心者向けにＮＩＥ活動を周知するため「これならできる！新聞活用――ＮＩＥ入門ガイド」を発行しました。広く普及を図るため誌面データをＮＩＥサイト（https://nie.jp/nieguide/）に掲載していますので、ご活用ください。

NIEでいきいき

「新元号『令和』に決定」「口蹄疫を忘れるな！」「会社と遊び方改革」「教科書、授業が変わる⁉」これらは全て、４月に入学してきた本校１年生の記念すべき第１回の新聞記事スクラップに付けられたタイトルである。

本校では、社会科の週末課題として全校生徒で新聞記事スクラップに挑戦している。各階にある各学年の廊下には新聞ラックが設置してあり、日常生活の中で気軽に新聞を手にすることができる環境にある。また、スクラップ帳は入学予定者向けに年２回実施される学校説明会で展示するので、新聞スクラップに興味をもち、新聞を読む習慣を身に付けて入学してくる生徒も少なくない。数年前には「全国新聞スクラップコンクール」において全国新聞教育研究協議会賞を受賞した生徒もおり、互いに刺激しあいながら意欲的に取り組んでいる。

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

指導教諭　木幡　佳子

◎宮崎県宮崎市／校長：黒木　淳一郎／生徒数：２４０人
◎特色：併設型中高一貫校として２００７年に開校し、19年度で創設13年目を迎えた。「真善美に胸をときめかす豊かな感性と創造力を備え、国際的視野で活躍する人材の育成」を学校教育目標に掲げている。「未知の我を求めて全力をつくそう」を合い言葉に、日々、朝の黙想や清掃活動「耕心」などオリジナリティーあふれる教育活動に取り組んでいる。

色とりどりのスクラップ帳

楽しそうに新聞を囲む生徒

各教科の授業においても新聞を活用する場面が多々ある。社会科では、解決することが困難な社会問題について新聞記事を活用して、議論している。流動的な社会情勢を議論する際に、新聞記事は欠かせないアイテムになる。また、国語科では毎年、「『新聞』感想文コンクール」（宮崎日日新聞社主催）と「いっしょに読もう！新聞コンクール」に全校生徒で応募しており、多くの生徒が入選を果たしている。昨年度は、このような取り組みが高く評価され、どちらのコンクールも学校賞を受賞した。

これから子どもたちが生きていくのは、正解のない問いが連続する社会である。新聞記事から現時点での暫定的な解を導き出し、たくましく生きていってほしいと切に願う。

事務局長から一言

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校は、創立13年と歴史は浅いものの、当初から積極的にＮＩＥに取り組んでいる。複数紙を読み比べられる恵まれた環境の中、気軽に新聞に親しむ生徒の姿は、新聞と子どもの理想的な関係を見るようで、いつも心強く感じている。

実践の中心を担う木幡指導教諭の的確な指導で、生徒は自然に多角的な視点を身に付ける。興味関心の広がりは、各自のスクラップ帳をのぞけば明らかだ。鮮やかに彩色したり自分なりの見出しを付けたりして、楽しみながら学びを深めているのが手に取るように分かる。生徒自ら蓄積する学びの標本は、きっと人生の宝になるはずだ。

（宮崎県ＮＩＥ推進協議会事務局長・湯田光）

NIEれーれ

今回はどんな先生が来てくれるだろう。秋田県内で年４回開かれているＮＩＥ学習会は先生たちの自主的な勉強会。開始直前まで何人集まるかが分からない、かなりルーズな会だ（上司の指示で集まる会ではない！ここがミソ）◆私の属する県ＮＩＥ推進協議会事務局は、何人集まるかといつも不安を抱えて会場を設営する。でも定刻が近づくと常連や子連れの先生、新顔と人数が増える。10人を超えると胸をなで下ろす。多い時で25人くらいだろうか。内容は最新メソッドの体験講座、先生や学校司書の取り組み発表など。教員志望や新聞部の高校生も来る◆ＮＩＥを深く理解し実践に情熱を燃やす人たちが会を支え、経験の浅い先生に助言もしている。ＮＩＥ大分大会の「楽しくなければＮＩＥじゃない！」が合い言葉。師走には杯を交わすほどのつながりです。

（秋田魁新報社・齊藤敦）